

ツチクジラ 太平洋・日本海・オホーツク海

Baird's Beaked Whale, *Berardius bairdii*

管理・関係機関

農林水産省

最近一年間の動き

2006年は昨年同様、全国で年間66頭の捕獲枠のもとに操業が行われたが、63頭で操業を終了した。

生物学的特性

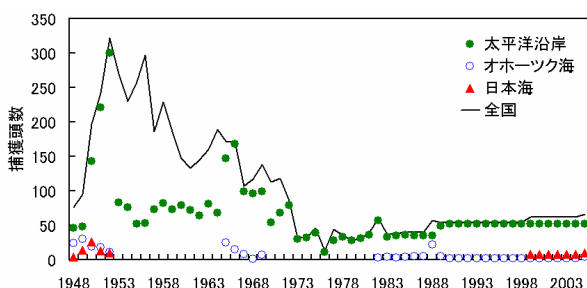
- 寿命: 雄 84 歳、雌 54 歳 (捕獲物の最高年齢)
- 成熟開始年齢: 雄 6~11 歳、雌 10~15 歳
- 交尾期・出産期: 10~11 月・3~4 月
- 繁殖場: 調査中
- 索餌期・索餌場: 周年・房総、常磐沖ほか
- 食性: 魚類、頭足類
- 捕食者: シヤチ

利用・用途

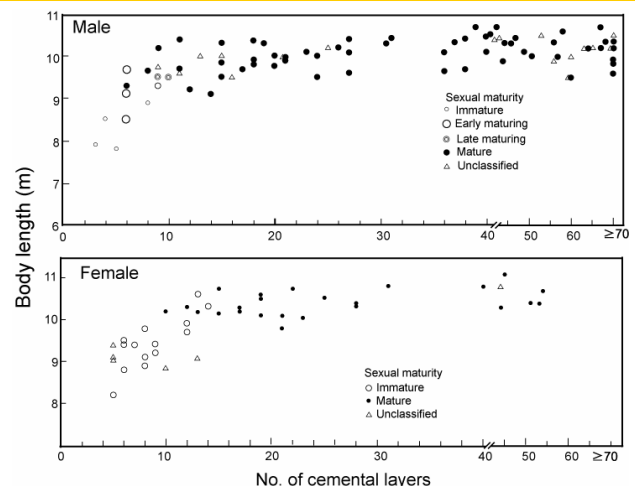
肉は房総半島周辺でタレと呼ばれる乾肉、他の地域では、鮮肉、缶詰用加工肉など。脂皮は汁物。

漁業の特徴

捕獲は少なくとも 17 世紀に遡り、明治時代初頭まで千葉県勝山沖等で手投げ釣で捕獲されていた。戦後、小型捕鯨業の捕獲が急増し漁場も千葉県周辺から三陸、北海道、日本海沿岸まで広がった。本種は体長 10 m に達する歯鯨類だが IWC の管轄外種で、商業捕鯨モラトリアム以降も、我が国の自主管理のもと沿岸域で商業捕獲が継続している。現在の商業捕獲は大臣許可漁業の小型捕鯨業のみで、全国 5ヶ所(千葉県和田浦、宮城県鮎川、北海道網走、函館)の捕鯨基地で水揚げ・解体・処理されている。



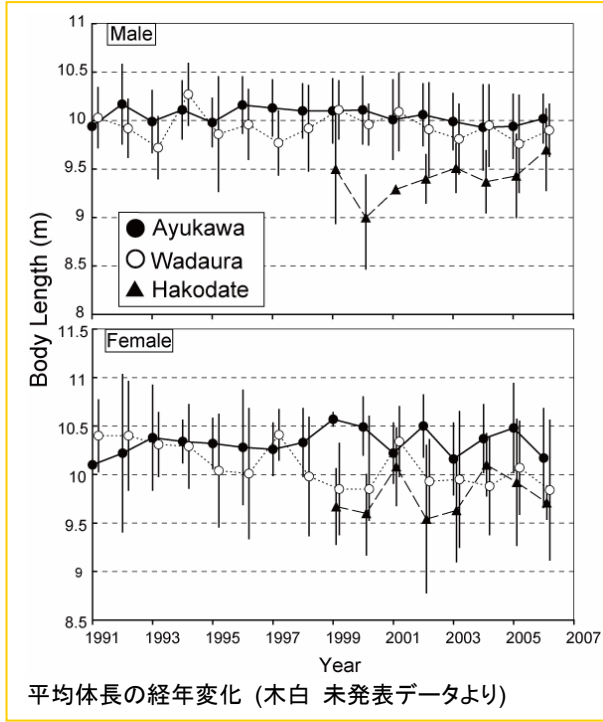
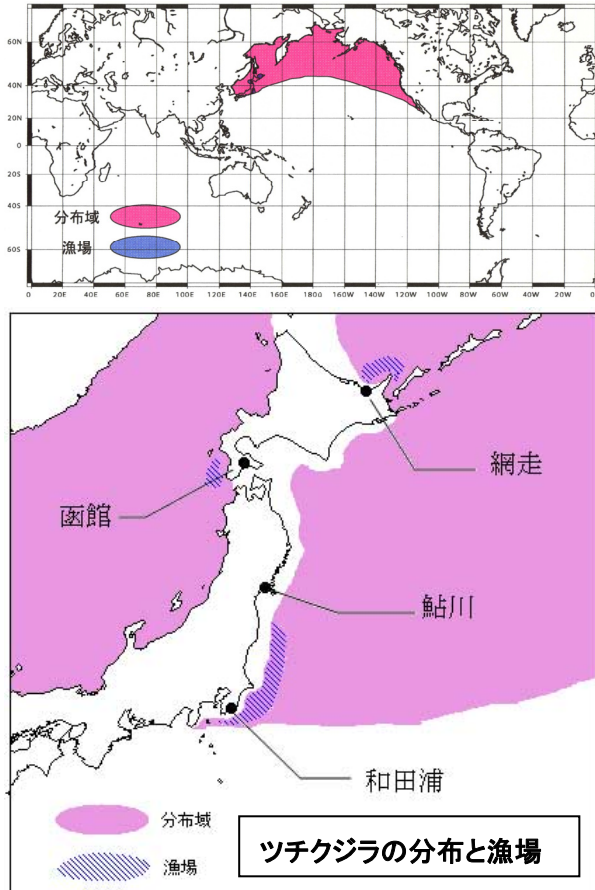
ツチクジラ捕獲頭数の経年変化(1948~1993年は粕谷(1995)、1994~2006年は遠洋水産研究所データより作成)



体長と年齢の関係(Kasuya et al. 1997 より)

漁獲の動向

太平洋側沿岸の捕獲が主体であり 1950 年代から 1970 年代初頭にかけて年間百頭を越える捕獲がなされた(自由操業)。1983年に自主規制枠、1990年に捕獲枠が導入され、1999年以降は、年間捕獲枠 62 頭(太平洋沿岸+オホーツク海 54 頭、日本海 8 頭)が設置されてきた。2005年に枠の見直しがなされ、系群ごとに太平洋 52 頭、オホーツク海 4 頭、日本海 10 頭、計 66 頭の捕獲枠が設置された。



資源状態

資源量の推定値は太平洋沿岸(北海道～相模湾):5千頭(95%信頼区間 2,500～10,000頭:1991～1992年)、日本海東部:1,500頭(同370～2,600頭:1983～1989年)、オホーツク海南部:660頭(同310～1,000頭:1983～1989年)である。IWCの管轄外種のため、資源状態に国際合意はない。1970年以前の捕獲が初期資源に与えた影響は明らかでなく(過去の統計は別種の混在の可能性があり)、各系群の大きさが5千頭以下と小さく、分布範囲も限られており、資源水準は「中位」とみなすのが妥当であろう。捕獲物組成の動向には、資源の増減の兆候はなく、資源動向は「横ばい」と考えられる。

資源管理方策まとめ

- 現在は推定資源量の約1%を目安に捕獲枠を設定し捕獲物組成の動向をモニタリング
- 将来的には、歯鯨類を対象とした資源管理モデルを開発し適用することが必要

管理方策

IWC 科学委員会はひげ鯨類が対象の新たな資源管理モデル(改訂管理方式 RMP)を開発したが、社会構造が複雑な歯鯨類には適用できない。このため、専門家らの合意に基づき、推定資源量の約1%を目安に、行政的側面も勘案しつつ水産庁が捕獲枠を設定している。この他、農林水産大臣の許可漁業として、海域ごとに操業期間(日本海:5～6月、太平洋沿岸:6～8月、オホーツク海:8月)、操業隻数(5隻)、水揚げ地を定めている。

資源評価まとめ

- 資源水準は中位、資源動向は横ばい
- 1980～1990年代の資源量推定値が最新なので、目視調査を継続し推定値の更新が必要

ツチクジラ資源の現況(要約表)

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年)	なし
我が国の漁獲量 (最近5年)	62～66頭 平均:63頭